





当時わたしの賃金は雇四級八号給六六五〇円であったから、これは多額の援助であった。しかも教会土地一部を毎日新聞西部本社が七七〇万円で契約が成立したというから、「……まだ米国人からの寄付金四〇万円を保管しており、教区に五四〇万円を納めても、教会資金として二七〇万円が残ったのである。」と記している。まるでイスカリオテのユダの銭計算のような様相の趣である。かくて一九五七年（昭和三二）常盤町五のアメリカ旧領事館が長崎聖三一教会の復興となった。

これら一教会史からみても、アメリカへの原爆意識は全くみられないということが、日常的通念としても認識できる。このことは戦後、対日援助としてガリオア資金、エロア資金などが送られたが、結局は日本に債務を課したに過ぎなかった。その中で一般民衆に親しかつたのはララ物資（アジア救援公認団体）が一九四六年から五二年にかけて四〇〇億円に達する物資援助を介しての人心への収攬、占領政策の効果として記憶すべきである。わたしも教会で二人が入るような巨大なズボンと背広を貰った。仕立て直して背広を着た初着となった。

これら事象は表題のキリスト者の原爆無識慰撫化効果の一端とも言えよう。全てが計量されておりアメリカ的プラグマティズムを表わしている。それをも人道主義の一端に加えるとしても、米国人の原爆無識とも底流的に繋がっていることは自明といえる。

核の廃棄がかくもとどこおって五十八年間を無為に過ぎ、地下核実験の上に又も、五月十三日の米露戦略核削減条約のマヤカシも、START IIを無視する無謀さにスウィッチされていることは間違いないだろう。全てが無識なのである。

思いついたことがある。NHK長崎放送が「長崎原爆の歌」として、一般も含む長崎被爆市民を対象に詩を募集して朗読放送したことがある。一九八〇年（昭和五五）八月にこれは一冊にまとめられ刊行されたが、この中でアメリカへの原爆意識の所在を検証してみたことがある。結果二〇八篇収録のうち、そのような明確な意識を表現したのは零であった。僅かに一篇／アメリカB二九 落せし原爆で／ああ無常にほろびゆく／規律やぶりてアメリカは／原子爆弾落せしに／なんとむごいことだろう／（土本ミツ）のことばを見つけた。

だから特にアメリカ表記でなくとも、原爆はアメリカに直結していることは間違いないだろう。例えば応募詩のなかで、／あじさいの花うなだれて／今日も降り続くつゆの雨／青紫にけむります／原爆の日がまた来ます／（岩本あい子）

わたしは内奥が語られないならば、それでいいではないか、と民衆の深いところでの、嗟嘆の思いを洞察するばかりなのである。